

止戈樞要卷百十五 師律要略

從位行佐守丹澹人增業著

守邊二

一 仲哀天皇九年十月三日神功皇后

艀祭鰐浦到新羅征三韓新羅臣復

以之卜云者船ヲ祭ノ以日本ノ軍

ヲ拒建稻種命其船ヲ破リ其軍ヲ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

来テ我應スルノ則ニアラス武子
兵法ニ善守者ハ九地ノ下ニ藏善
攻ル者ハ九天之上ニ勤ク故ニ能
自保而全勝ト謂リ神功皇后ノ三
韓ヲ征スルモノハ信ニ善攻ル者
ニシテ九天ノ上ニ勤ケルナリナ
ンソ又善ク守ル者十カヲン邊境
ヲ堅シ武備ヲ事トセハ九地ノ下
ニ藏ルノ道ナルベシ此篇ヨリ下
弟ニ段築塞備不虞安國民之道ヲ

殺戮シ終日大ニ戰新羅王神威ヲ
恐レ怖皇后ノ御船ノ前ニ降り日
本ノ飼部夕ヲレ丁ヲ求別新羅王
波沙寐錦出微叱已知波珍干歧モ
ツテ質トス高麗王及百濟王モ自
ラ来テ服シ降ル是ニ於テ皇后師
ヲ還シ玉ヒ大矢田宿禰ヲ鎮守將
軍トシテ新羅ニ苗メ玉ハリ是我
國異賊ヲ征スルノ初ナリ是ハ此
我往テ彼ヲ征スルノ道ニシテ彼

説神功皇后ノ征伐ノ如アレハ又
守國テ彼襲侵下不能ノ術アルヲ
明ス熊襲ヲ征レトシテ流矢ニ中
終ニ崩御ナレトシテ神功帝未位ニ付
タマハス故仲哀帝ノ九年ト云
浦ハ對馬朝鮮ニ近浦ニ飼部ハ下
職ニ波沙寐錦新羅王ノ名微叱已
知波珍干岐何モ人名ニ微叱ハ王
子ニ是我國異賊ヲ征ノ初ニ是ヨ
リ内ニ征伐ノ下ニ皇太后征伐九

天ノ上ニ勳ト云ニ當タマハ又
九地ノ下ニ藏ノ守法ナリテ不叶
事ニ其善藏テ夷賊ウカ、フ下能
ザルハ何則邊境ノ堅武備ノ下ニ
邊境ノ堅武備之事則次ノ章ニ述
ス

一崇神天皇年ニ初テ四道將軍ヲ立
テ天平勝寶八年六月始テ怡土城
ヲ築キ大宰大貳吉備朝臣真備ヲ
シテ專ラ其事ヲ掌ラシム天平室

字三年ニ太宰府ニシテ行軍式ヲ
造リ同四年十一月ニ授刀舍人春
日部三関中衛舍人土師宿禰関成
等六人ヲ太宰府ニ遣シ大戴吉備
朝臣ニツイテ陣法ヲ習ハシム又
養老神龜ノ比ヨリ東夷ニ備ルカ
為ニ初テ奥州宮城郡中ノ松山ニ
城ヲ築キ多賀城ト號シ案察使ノ
居城ト定ム同夕續日本紀ニ曰ク
元正天皇養老三年秋七月庚子始

按察使ヲ置ク詔シテ曰朕之股肱
民之父母獨在按察使寄重務繁與
群臣異ナリトニ聖武帝神龜年ニ
ハ大野東人東海東山節度使兼鎮
守府將軍トシテ多賀城ニ下リ天
平勝宝七年ニハ惠美朝臣蔭東海
東山ノ節度使兼鎮守府將軍夕リ
源氏ニ於テモ多田滿仲出羽奥州
ノ堺武隈城ニ下リ玉ルナトイッ
レモ東夷ヲ防カシ為ニ此前後ニ

邊城武備ヲ以九地之下ニ藏ト云
ノ證ヲ明ス怡土城ハ早良親王軍
記曰怡土ノ城ハ吉備ノ朝臣真備
造ル所也其矩能天時ニアタリ禦
守又地ヲ全フス柵城ノノリ自今
下以之シルシトスベキモノナリ
ト云
一夫國ノ大務ハ戎備ヨリ先スルハ
ナシ若乃コレヲ毫釐ニ失スレハ
コレ千里ニ差軍ヲ覆シ將ヲ獲

ル、一勢息ヲ不踰ヲソレサルハ
ケンヤ國若難アレハ君臣旰食コ
レヲ謀ル若乃安ニ居テ危ヲ思ハ
ス寇至テ懼ル、一ヲ知ラサルハ
燕幕ニ巢セ魚ノ鼎ニ遊フニ同シ
凶ヒンコトクヲマタズ故曰不備
不虞ハモツテ師スベカラス又曰
豫無虞ニ備ルハ善政之道ト書
経ノ說命ニ曰車馬ヲ脩メ器械ヲ
備ヘ兵事ヲ事トスル寸ハ兵其備

アリ故ニ外侮コレガ憂ヘテナス
一アタハスト云ヘリ又案ニ國ノ
大務ハ戎備ヨリ先スルハナシ治
國ノ先務大事戎狄ノ来侵テ不能
備ヨリ外ナシト周ノ世春秋ノ
時ヨリ明ニ至ルマテ北狄中華ヲ
侵徳及彼其備嚴ニ其将善ナル時
ハ不来無備之ハ入寇ス明衰ルニ
及テ終ニ狄ノ為ニウハワレタリ
如此ナレハ是ヨリ先ナルハナキ

之毫釐失スレハ千里ニ差ト其備
方敵當シテ彼午ヲ出テアタハス
心恐テ仰ノソマサル様ニ計ルヘ
シトナリ若此所少ノアマチア
ツテ彼ヲ破テ服従セシメント之
又来寇スルノ道ヲタ、ント長城
ヲ築ノ如ニ至テハ大ニツイエテ
生ス則此段ハ下篇ニ論スル一審
之勢息ヲ不踰ト至テ急卒ナルヲ
云君臣盱食ト謀之切ニシテ食其

時ヲ失ヲ云安ニ居テ危ヲ思ハス
トハ不知大務常ニ戎備ナキヲ云
寇至テ懼ル、下ヲ知ラストハシ
ニ食ヲ忘テ防之ノ謀ナキヲ云燕
幕ニ巢ヒ魚鼎ニ遊ハ不智ノ甚シ
ヲ半時ノ先ヲ察スルア夕ハナル
ヲ喻故ニ古語ニモ云処ノ備ナリ
ニハアルベカラサルヲ證トスベ
シ

一 我國左形ハ南ヲ前トシ北ヲ後ト

シ東ヲ左トシ西ヲ右トシ以東為
枕以西為後卧寢シ安スル故本唐
朝鮮女真琉球ヲ以西方ノ賊トシ
蝦夷ヲ以東方ノ夷トス上古九州
奥羽ニ鎮西鎮東ノ大將軍ヲ置テ
守ラシム此心ナリ
一元良哈ハ朝鮮ニ隣リ我國ニ近シ
ト云氏古ヨリ不通春秋ノ時ノ歳
秦ノ遼西ニシテ其風俗北狄ト同
シ然レトモ外國へ出テ戦フトヲ

不好ト見ヘタリ出テ戦フ時外ヨ
リ其跡ヲウカ、ハレシコヲ恐カ
故ニ不出ト云リ
一神功皇后四十九年ニ荒田別及鹿
香別ノ兩將ヲ以テ新羅ヲ討スル
誓ヲソムクヲ以テ宣化二年ニ狹
牟彦ヲ以其亂ヲ鎮メシム奔明七
年新羅ヨリ百濟ヲ討ス其時新羅
王豊璋我國ニ質タリ臣福信ヲ以
日本ノ助兵ヲ乞故ニ豊璋ヲ帰シ

寇ヲ討シム齊明帝ハ奈良ノ都ニ
天智帝大子ニシテ土佐國朝倉ニ
行幸有黒木ノ御所ヲ作テ萱ニ関
ヲ居テ往來ヲ糾シ軍中ノ改テ攝
シ玉フ是所謂朝倉ノ木丸殿ニ秦
ノ朴市ハ兵五千ヲ率豊璋ヲ送齊
明帝其年七月崩天智帝素服シテ
自ラ改事ヲトリ阿曇阿部ノ兩將
ニ兵船百七十艘ヲ加勢ニ遣ス其
後帝大和ニカヘリ宮居シ玉フ又

本唐新羅合高麗ヲ討高麗王兵ヲ
日本ニ求ム此ノ時本唐ノ將任稚
相ハ病テ死ス麗孝討死シ蘇定方
引退其翌年日本ヨリ数万軍ヲ遣
シテ新羅ヲ討故ハ豊璋ト福信ト
不和ニメ信ヲ殺ス此虚ニ乘テ新
羅ヨリ又本唐ノ勢ヲ乞テ百濟ヲ
討中國ノ兵船百七十艘白江口ニ
来テ日本ノ兵ト戦日本ノ兵討ル
者数十人朴市曰来津歌兵数十

人ヲ討テ終ニ死ス豊璋モ敗テ高
麗ニ走ル日本ノ兵帰國ス其後筑
紫野ニ城ヲ築兵ヲ以守ラシム
大和高安ノ城讃州八島ノ城モ此
敗ニ導ル之齊明四年ニ肅慎ヲ又
討武威ヲフルテ彼ヨリ来討テ
能サラシムル為ニ肅慎ハ別女真
國ニ桓武帝ノ時蝦夷ヲ討テ延暦
七年紀古佐美ヲ征夷將軍トシ池
田信收安部黑繩ヲ副將軍トス官

軍三千餘人討死シ夷首ヲ得テ八
九十之九月ニ歸京ス古佐美ハ將
軍ノ官ヲ戾シ黒繩ハ官ヲ削ラレ
重テ大伴ノ乙磨ヲ征夷將軍トシ
坂上田村丸ト奥州ノ大守百濟王
後哲トヲ副將トシテ東夷ヲ討シ
ム功アリ又奥州ノ賊高丸駿州清
見カ逆切テ出田村丸征夷將軍ト
シ鄭カヲ給リ神樂岡ニシテ討之
此異夷ヲ征テ神功皇后征伐ノ後

一
数度アルヲ以其地利國風ヲ兼テ
料知ヘキトナリ又異國ノ日本ニ
近キト如此ヲ知ヘシ
近クハ足利將軍ノ時吾國ノ海賊
大明ノ地ヲ侵シ掠ルト折直閩廣
ノ間ナリ故宗憲戚繼光命大猷ガ
トモカウ戦テ不休和寇ヲ防クト
モツトモ浙直閩廣ノ地ナリ倭賊
船ヲ捨テ南京ニ到ル事利ナシト
見ヘタリ足利家ノ失明ノ邊ヲ侵

ス是ハ能島来島因島等ノ海賊之
閩ハ福州也廣ハ廣東之浙ハ浙江
杭州直ハ女真之何レモ海邊ノ地
之為防之清野且明ノ名將其地ニ
向テ防之小勢ヲ以侵ノ故ニ深クニ
南京ニ到テハ勝利アルトテ故
ニ船ヲ城トシ不離シテ其近邊ヲ
侵ス既ニ秀吉令攻朝鮮ノ諸將何
モ船ヲ離ト遠ヲ以平壤蔚山ノ城
等ヲ根トス故ニ明兵ノ為ニ大ニ

一
敗レス遠ク征スレハ必防敵ノ便
十クシハアルベカラス
一日本ヨリ浙江へ到ルト凡三百五
十里朝鮮ニ到ルト四十八里^琉球ニ
到ルト三百里ナリ異國ヲ出征ス
ルト無ニアラサレハ防禦ノテダ
テヲスルトモ海路ノ行程ヲ知ス
ンハアルベカラス地理全書ヲ案
ルニ福州へ三百二十里トアリ浙
江ノ行程ハ知サレ共何モ春秋ノ

越ノ地ナレハ凡同カルベシ朝鮮
ニ至自對馬都伊寄至朝鮮釜山浦
四十八里之琉球國ハ薩州ノ西南
海中ニアリ都名那霸自薩州至那
霸海上ニ百八十里此間ニ七ノ島
アリ是ヲスキ大平山迎恩亭天使
館ノアタリマテ三百里ナルベシ
一殷ノ武丁伐鬼方者三年ニシテ克
リ我國ノ神功皇后ノ三韓ヲ征ス
ルナンソソ速マカナルヤ單于

漢ニ寇スル漢ノ高帝以女妻之和
親ス大元ノ日本ニ攻来ル生歸ス
者僅ニ三人何ソソレ武健ナルマ
我國神代ニ於テ八千戈千足國ト
号ス異邦稱シテ君子國トス神國
武國義國タルト外夷ナンソ懼サ
ラント有ンヤ

止戈樞要卷百十五終

五丈嶽與塔百十通於山之頂朝野

三至自新島塔塔塔塔塔塔塔塔塔

四十八人之珠珠國以堂州

五丈嶽與塔百十通於山之頂朝野

六丈嶽與塔百十通於山之頂朝野

七丈嶽與塔百十通於山之頂朝野

八丈嶽與塔百十通於山之頂朝野

九丈嶽與塔百十通於山之頂朝野

十丈嶽與塔百十通於山之頂朝野



